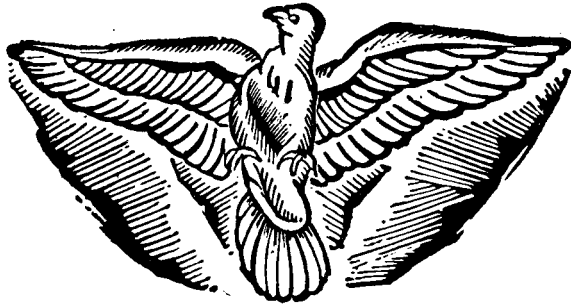


著 順 田 川

本 定

歌 悲 の 朝 野 吉

作 部 三



京 東

房 書 一 第

吉野朝を憶ふ

——序に代へて

元弘・建武を前置として延元から本筋に入つた吉野朝約六十年を、皇國歴史の上に於いて、如何なる時代とおもふか。

山谷に、離落に、行在を徙遷遊ばされたこと數箇所、それさへ斷えず賊襲と兵火との脅嚇を免れ給はなかつた。亂軍の間、畏多くも主上の御鎧に矢二筋及ぶとさへ太平記に書いてある。吉野朝四代の主上の御二方までは、荒涼たる行宮の裡に崩御しました。

一皇子は土窟内にて弒逆にあひ給ひ、一皇子は落城の猛火中に自裁し給ひ、二皇子は賊將の上つた毒藥を嚙んで薨じ給ひ、一皇子は御身に三劊を被りつつ奮戦し給ひ、一皇子は御生涯流轉の戎旅をつづけ給うた。

乍併、國みだれて忠臣あらはる。おのが一命を捧げ奉るに止まらず、兄弟相誘ひ、父子相率ゐて、一族君國に殉じたるもの、新田・楠木・菊池・北畠・四條等々枚擧にいとまない。武臣は勿

論、月卿雲客といへども、手に執り馴れぬ弓矢を執つて、大君の御楯に立つた。「長袖いづくんぞ兵を知らんや」の嘲罵は、彼等に向つては的が外づれてゐる。公卿も武臣も、正系の皇統を擁護し奉つて、よく忠、よく誠、數十年の試鍊に堪へた。日本國民の信念、煌々として光射したと、此の時に比ぶべきは多くない。

「歌書よりも軍書に悲し吉野山」といふ江戸時代の俳句がある。市井の一俳客、おそらくは辻講釋の太平記に傾聽して、新葉集も李花集も拜讀しなかつたのであらう。兩歌集を知らずして、吉野朝を語ることは出来ない。其處に、進軍喇叭の勇壯なる律呂は殆ど聞き難いけれども、肅々として枚を衝む軍勢、又は慘として驕らざる陣營のありさまが彷彿とする。皇軍今日の忠勇と延元・正平の官軍が忍苦と、一にして二でない。

草莽の一詞人、敢へて筆を呵して、當年を偲び奉る所以である。

昭和十四年九月

川 田 順

總目次

緒言 一五

第一部 吉野朝の悲歌

一	後醍醐天皇御製二十三首	二一
二	後村上天皇御製九首	三七
三	長慶天皇御製八首	四五
四	後龜山天皇御製二首	五〇
五	尊良親王御歌五首	五二
六	懷良親王御歌一首	五六
七	源勝法親王御歌一首	五七
八	仁譽法親王御歌四首	五八

- 九 新待賢門院御歌三首 六〇
- 一〇 嘉喜門院御歌一首 六三
- 一一 新宣陽門院御歌一首 六四
- 一二 長慶天皇中宮御歌一首 六五
- 一三 瓊子內親王御歌一首 六六
- 一四 祥子內親王御歌一首 六九
- 一五 藤原俊基一首 七〇
- 一六 源具行二首 七二
- 一七 花山院師賢十一首 七五
- 一八 菊池武時一首 八三
- 一九 讀人不知一首 八五
- 二〇 萬里小路藤房三首 八八
- 二一 二條爲冬一首 九二
- 二二 源忠顯一首 九三

二三	祐覺法師一首	九五
二四	一條行房一首	九六
二五	吉田定房一首	九七
二六	坊門清忠一首	九八
二七	新田義貞一首	一〇〇
二八	菅原在仲一首	一〇二
二九	楠木正行二首	一〇三
三〇	四條隆資二首	一〇六
三一	津守國夏一首	一〇九
三二	北畠親房四首	一一一
三三	北畠守親一首	一一四
三四	洞院公泰二首	一一五
三五	二條爲明一首	一一七
三六	二條師基一首	一一九
三七	花山院家賢一首	一二〇
三八	西園寺公重一首	一二一

三四	源賴武四首	一四三
五三	源成直二首	一四二
五二	藤原實興二首	一四〇
五一	左近大將公長一首	一四〇
五〇	大納言光有二首	一三九
四九	藤原師兼六首	一三五
四八	阿野實爲一首	一三三
四七	二條冬實四首	一三一
四六	二條教基一首	一三〇
四五	大僧正賴意二首	一二八
四四	大中臣隆基一首	一二八
四三	津守國貴一首	一二七
四二	吉田宗房一首	一二六
四一	藤原光任一首	一二四
四〇	足助重春一首	一二三
三九	四條隆俊一首	一二二

五五 二條爲忠一首 一四六

五六 花山院長親四首 一四八

五七 藤原師賢室一首 一五二

五八 北畠顯家室一首 一五三

五九 伊賀局一首 一五六

○ 吉野朝和歌概說 一五七

第二部 宗良親王

宗良親王全紀

初期 一七一

東海時代 一七八

北越時代 一九七

前期信濃時代 二〇三

後期信濃時代 二三一

晩期・・・・・・・・・・・・・・・・二五一

親王傳諸種・・・・・・・・二六六

郷土史覺書・・・・・・・・二七九

宗良親王御歌詳解

一 歌人宗良親王・・・・・・・・二九一

二 初期二首・・・・・・・・三一八

三 東海時代十二首・・・・・・・・三二〇

四 北越時代十六首・・・・・・・・三三一

五 前期信濃時代二十首・・・・・・・・三四一

六 後期信濃時代二十六首・・・・・・・・三六一

七 時代未勘十七首・・・・・・・・三八二

八 晩期二十七首・・・・・・・・三九四

第三部 吉野朝の悲歌・續篇

一 後醍醐天皇御製十首・・・・・・・・四一七

二 後村上天皇御製六首・・・・・・・・四二六

緒言

皇國の興廢を決する大事が、私等の眼前に展開しつつある。忠勇なる皇軍の將兵等は、人間業と思はれぬ努力を致して、支那南北の山野に尊き鮮血を流しつつある。一布衣に過ぎぬ私といへども、自己に即した歌のみを作り、自己に即した文章のみを發表してゐては、國民の一員として相すまぬと考へた。私如き者の禿筆によつて文章報國が出来ようものとは自負しないけれども、此の秋、適切なる題目に向つて一心を凝集したならば、日本民族の傳統的精神を昂揚する上に、大海一滴底の供物には成り得ようと考へた。着手した仕事は、吉野朝廷の君臣が血を吐く如き倭歌の粹を抜いて、それらへの解説及び感想を述べた小著を公にする事であつた。さうして、約一箇年半を費して三部作を完成した。「吉野朝の悲歌」は第一期作戦の長城戦及び上海戦の最中に書かれ、「宗良親王」は第二期作戦なる徐州包圍戦の前後に書かれ、「吉野朝の悲歌・續篇」は第三期作戦武漢攻略の前驅なる潛山激戦の行はれた頃に執筆を開始したものである。皇軍の驥尾に附して吉野朝の精神史を研究させていただいた事を、深く感謝せねばならぬ。

先づ私は當年の時勢を知らねばならぬと考へ、正史たると野史たると物語たると傳説たるとに

關せず、神皇正統記・増鏡・建武年間記・梅松論・太平記・吉野拾遺・櫻雲記・南方紀傳・菊池傳記・浪合記・信濃宮傳・鎌倉大草紙・讀史餘論・池藻屑・南山巡狩錄・菅政友全集等の類を耽讀して、元弘・建武乃至天授・弘和の歴史と世相との概要を會得した。次いで、小著の目的たる和歌の蒐集に歩を進め、文獻として信據し得べき撰集・家集・歌合・千首歌・史書・物語・日記の類三十種内外を涉獵した。最も考慮を費したのは、如何なる作を抜くべきかであつた。新田義貞・四條隆資と云ふやうな忠臣中の忠臣に在つては、たとひその歌が不適當なものであつても、小著の性質上採り上げた。大楠公の歌として信ずべきものの傳はつてゐないには失望したが、おそらく彼は、兵馬倥傯、劍を揮ふに日もこれ足らず、吟懷の遑なくして忠骨を曝らしたのであつたらう。是れ或は、歌有る以上に尊い生涯だ。新葉和歌集の作者約一百五十人あるけれども、私はその中の六十餘人を採り得たに過ぎなかつた。何故といふに、小著の目的上、普通の花鳥風月詠は割愛せざるを得なかつた爲めだ。(又、新葉集の生命は、實に花鳥風月に非ざること云ふ迄もない。) 私の研究對象は當年の「悲歌」である。吉野朝廷君臣の「悲歌」、すなはち直接又は間接に當年の時局に即して境涯を吐露した歌である。結局、三部作を通じて、掲載し評釋したものは、作者八十七人、和歌總計四百十九首。その歌の出典如左。

新葉集、一百七十三首。

李花集、九十二首。

天授五百番歌合、三十二首。

増鏡、二十一首。

宗良親王御千首、十七首。

太平記、十二首。

吉野拾遺、十一首。

師兼卿千首、八首。

耕雲千首、八首。

嘉喜門院御集、六首。

臨永集、六首。

新千載集、五首。

新續古今集、四首。

看聞御記、三首。

續後拾遺集、二首。

玉葉集、一首。

續千載集、一首。

風雅集、一首。

新拾遺集、一首。

新後拾遺集、一首。

爲冬卿集、一首。

藤葉集、一首。

續現葉集、一首。

天正本太平記、一首。

金勝院本太平記、一首。

和州巡覽記、一首。

其他、八首。

他の歌書・物語の類にも出てゐる歌でも、新葉集所載のものは、皆それへ算入したので、同集の歌數が斯様に多くなつたのである。私は歴史に暗いので、傳紀・考證等には誤謬があらう。それは専門學者の叱正を乞ふ。乍併、私は作家であるから、小著に抜いた歌には、決して凡庸の作はない。作者の排列に就いても考慮した。皇室の御方々を卷首の部分に置き奉るは無論の事、臣下については、傳紀を調べて、歿年の順序に従つて並べた。歿年の不明な者は、掲載の歌の詠まれた年月の前後に従つた。婦人は一括して、男子の部の次に置いた。

歴史で判明してゐる人々の略傳は容易に書き得るけれども、然らざる人々の傳を知るには難儀した。竟に不明の人さへ何人かある。神原忠次の「新葉集作者部類」にある官歴・歿年の考證から、不尠恩惠を蒙つた。忠次の爲したやうな地味な仕事か、如何に多く後學を益するものなるか

を、此の際更めて深く考へさせられた。私は、各首の歌の解説に當つて、作者を傳するは勿論、その歌の詠まれた場合の歴史的事件を繁を厭はず記述した。「吉野朝」と言ふからには、延元以降の作のみを採るべきであるかも知れぬが、元弘・建武は吉野朝の前提で、それと不可分に考へられるゆゑ、元弘まで遡つて歌を物色した。又、尹良親王・自天王・楠木光正・文屋將監は所謂「後南朝」の歴史に屬するので、本書の内容に入れる事は、種々なる意味に於いて不適當かも知れぬ。乍併、吉野朝の歴史の連續として後南朝の研究は近來頗に盛んになつて來たやうに思はれる。それで本書も觸れる事にした。乞諒。

亡父川田甕江は、楠氏の忠烈を欽慕し、「楠氏考」等の著述及び論文を遺した。けれども、それ等は多く漢文なるが故に、今日専門家以外には讀まれぬらしい。貧弱極まる此の小著をも、亡父の靈はみそなはずに相違ない。

一 後醍醐天皇御製二十三首

第九十六代の天皇。御諱は尊治。後宇多天皇第二皇子、御母談天門院藤原忠子。文保二年二月御即位。天皇英邁、かねて討幕の御企あつたが事漏れて所謂正中の變が起つた。尋いで、元弘亂（元弘元年八月）起り、その結果、翌二年隱岐遷幸。三年五月高時誅に伏し、建武中興の御代が到來した。然るに幾何もなく尊氏叛逆し、以來戰亂熄む時なく、延元元年十二月、天皇神器を奉じて吉野に潛幸し給うた。御在位二十一年にして、同四年八月十六日、行宮に崩御。寶算五十二。如意輪寺側の塔尾陵に奉葬。現に官幣大社吉野神宮に奉祀。御製所載は新葉集四十六首、新後撰集三首、續千載集十九首、續後拾遺集十七首、風雅集三首、新千載集二十四首、新拾遺集九首、新後拾遺集五首。

うかりける身をあき風にさそはれて思はぬ山の紅葉をぞ見る

○増鏡第十八「むら時雨」の章に出。寶算四十四の御時。元弘元年秋、笠置行在所にての御製。歴史によれば、天皇には此の年八月（陰曆）廿七日から九月廿八日まで丁度晩秋一箇月を笠置山

中で過し給うたのであつた。「いかになりゆくべきにかと、いと物心ほそく思し亂る。我が御心もての御事なれば、かこつかたなけれど、故郷の空もあはれに思し出でらる。秋も深くなりゆくままに、山の木の葉の打しぐれ谷の嵐の音づるるも、仇の競ふかと肝を消す。御すまひ、いつしか御身をかへたる心地し給ふもあぢきなし」と増鏡の作者は美辭をつらねて、次に此の一首を點出してゐる。上句、苦しくつらい我が身を折柄の秋風に誘はれて都を出で、といふ意であるが、あき風は身を厭くと懸詞にされてゐる。「憂き身は世にも厭き果てた」といふ意がこもつてゐる。後撰集に「穗には出でぬいかにかせまし花すすき身を秋風に捨てやはてなむ」といふのがある。思はぬ山、豫想もしなかつた斯様な山深い處の意。

さして行くかさぎの山を出でしより天あめがしたにはかくれがもなし

○太平記卷第三「主上御没落笠置事」の章に出。九月廿八日、折からの風雨中を、賊軍の夜襲によつて笠置は陥落した。藤原季房兄弟に御手を引かれ給ひ、「忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひてすることも不知迷ひ出でさせ給ひける」云々と太平記にある。晝夜三日して、まだ笠置山から幾らも離れてゐない山城國多賀郡有王山の麓まで落ち延びられた。木々の雫の御袖にかかるを雨が降るかと思召されて、「さして行く」云々と詠し給うた。○かさぎの山のかさ（傘）を中心として、その縁語で一首をあやなされてある。さしてゆくは傘の枕詞、天が

下の天には雨を利かせ、かくれがには雨やどりする場所の意を持たせてある。一首の意は、簡明で、笠置山を落ち延びてから、此の廣い天下に、わが躬一つを忍ぶべき隠れ場所もない、と嘆じ給うたのだ。南方紀傳には第三句落ちぬればとして載せてある。その方が雨の縁語にもなつてゐて、技巧のあやは一層深くなる。○御製に對して、藤房が「いかにせむ頼む蔭とて」云々と和し奉つてゐるが、その事は「萬里小路藤房」の條で後述する。

まだ馴れぬ板屋の軒のむら時雨おとを聞くにも沾るる袖かな

○新葉集卷第十六雜上の部・増鏡第十八「むら時雨」の章、及び太平記卷第三に出。新葉集には詞書なく、いかなる時の御製ともことわつてないが、増鏡にはこまごまと前置が書かれてある。すなはち、「六波羅の北なる檜皮屋にはもとより兩院春宮おはしませば、南の板屋のいともあやしきに、御しつらひなどしておはしますにも、いとほしうかたじけなし。間近き程に、萬聞し召し、御覽じ觸るる事ごとにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらん。口惜しう思し亂る。ならはぬ御やどりに、時雨の音さへはしたなくて」云々。小説の積りで歴史を書いてゐる所が窺はれる。檜皮屋の立派な建築の方には武家方の後伏見・花園兩院及び皇太子を大切に移し置きまゐらせ、粗末な板屋の方に前述有王山で賊手に落ち給うた後醍醐天皇を幽閉しまゐらせたど、書いてある。○まだ馴れぬ、まだ住み馴れぬ。むらしぐれ、晩秋から冬へかけて、はらはらと降る驟

雨のこと。音をきくにも沾るる袖かな、袖に降りかかるのではなく、ただ音を聞いただけでも、我が袖は沾れる。さびしさに御泪で御衣の濕ふことを意味してゐる。此の御製、太平記には「住み馴れぬ板屋の軒のむら時雨おとをきくにも袖は沾れけり」とあり、梅松論には第一句だけ「住みなれぬ」と變つてゐる。

いのちあればこやの軒端の月も見つ又いかならむゆくすゑの空

○増鏡第十九「久米のさら山」の章に出。寶算四十五の御時。天皇には五箇月あまり六波羅に幽閉せられ給ひ、元弘二年三月七日御出發。隱岐の遠島に向つて遷幸あそばされた。内侍の三位（廉子・後の新待賢門院）・行房中將・忠顯少將など少數の人々が供奉した。翌八日の晩、攝津昆陽野の宿に御著きの際の御製である。○いのちあれば、憂き身ながらに、なまなかいのち長らへ居るがゆゑ。こやの軒端の、地名の昆陽と、御休泊所の小屋とを兩方利かせてある。拾遺集の「葦の葉にかくれて住みし津の國のこやもあらはに冬は來にけり」と同様の技法。又いかならむ行末のそら、いのちある故に、斯かる陋屋の軒もる月光を眺めねばならぬ境涯に落ちたのだ。乍併、これからなほ遙々と隱岐まで行く。生きてゐたならば、此のこやの月光どころでなく、もつと淋しく、もつとすさまじいものを見ねばならぬのであらう。どう成りゆく事かと、將來の御身の上を思ひ煩らひ給うたのである。

水の泡の消えでうき世をわたる身のうらやましきは海人の釣船

○増鏡同章に出。福原（現在の兵庫邊）から御船に召され、内海に出で給ふ途中、明石の浦邊りにての御製。水の泡の如く消えてもしまはずに、浮きながら此の世を漂ひ渡る現在のわが身には、羨しく思はれるのは此の心配もなげなる漁師の釣船でもある、との御感慨。陰曆三月中頃の事として、春深く、海上は麗らかに霞みわたつてゐる。そこに、心ない海人どもの、氣樂さうに見える生業を、一天萬乗の君主が「うらやまし」と仰せ給うたのである。○水の泡、消、浮世は縁語。わたる、釣船も縁語。

あはれとは汝も見らむ我が民を思ふ心は今もかはらず

○増鏡同章に出。「十七日、美作の國におはしましつきぬ。御心地なやましくて、この國に二三日やすらはせ給ふ程、かりそめの御やどりなれば、物深からで、候ふ限りの武士ども、おのづからけぢかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君も思し續くることありて」として、此の御製を載せてゐる。美作山中の行在で、警衛の武士共と二三日近づき給うて、彼等に仰せ掛けられた御述懐である。○武士共よ、此のわれを氣の毒とは汝等の眼にも見えるであらう。斯ういふ境涯に落ちながらも、我が蒼生等の上を案じ煩らふ心情は、唯今も少しも變つてゐない我であ

るものを。○まことに、帝王にのみある深い御心持と拜察する。

二六

よそにのみ思ひぞやりし思ひきや民のかまどをかくて見むとは

○増鏡同章に出。すぐ續いて此の御製。その美作山中の行在となつた民家で、軒から立ち騰る炊事の煙を御覽あそばされて、「今迄は、竈土かまどといふのはいかなる物かとおほよそに想像してみたのであつた。思はざりき、かかる旅に出て、民家の厨の有様をかくまのあたり見ようものとは」と仰せられたのだ。おなじく帝王が「民のかまど」を眺め給ふにしても、「高き屋に登りて見」たまひし古とは霄壤の差である。

聞きおきし久米のさら山越え行かむ道とはかねて思ひやはせし

○増鏡同章に出。此の山は、古今集に「美作や久米のさら山さらさらに我が名は立てじ萬代まで」と詠まれた歌枕なので、有名だから、天皇もかねてからその名は聞いていらせられたのである。遷幸の途次はしなくもその山のあたりを越え給うて「かねて名こそは聞きおいたが、斯かる有様で此の山を越えようとは、夢にも思つたことか、思ひはしなかつた」と御嘆息遊ばされた。

さもこそは月日も知らぬわれならめ衣更へせし今日にやはあらぬ

○増鏡同章に出。出雲國にて、四月一日の御製。陰曆四月一日は更衣の日である。更衣とは、「一定ノ季節ニ一定ノ衣服ヲ改メテ着用スルコト、中古ハ、陰曆四月朔日ヨリ裕ヲ着ル、寒クレバ下ニ、白小袖ヲ用キル、コレヲ白重ト云フ、五月五日ヨリ帷子ナリ、涼シキ時ハ下衣ヲ着ル、コレヲ一重がさねト云フ、八月十五日ヨリ生絹、九月九日ヨリ綿入、十月朔日ヨリ練衣ヲ着ルナリ、江戸時代ナルハ稍異ナリ」と大言海にある。さもこそは、さは然で、もは感動詞を添へたのである。このやうにこそは、の意。月日も知らぬわれならめ、月日の移り變り行くも覺えぬ我が身なのだらう。その裏に、日月も照らし給はぬ我と云ふ意もこめられてゐる。今日にやはあらぬ今日ではないか今日である。都に御座在りし今迄は、毎年今月今日、御給に着替へ給うた、その年中行事の日なることを、ふと思ひ出で給うて、御旅装のままに着替へも遊ばされぬ唯今のこと、悲しまれたのである。

忘れめやよるべも浪の荒磯をみ船の上にとめし心は

○新葉集卷第八齋旅歌に出。よるべも浪の荒磯を、身の寄る邊もなきを浪に懸け、その浪の荒き磯なりしを、の意。忘れようか、忘れることではない、身の寄る邊もない荒浪の渚ではあつた

が、幸に船あつて、その中に身を寄せ得た時の心は。○新葉集の詞書は「題しらず」とばかりしてあつて、如何なる場合の御事を御追懐あそばされたのか判明しないが、新葉集の左註に「この御歌は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ給ひける時源長年お迎へにまゐりて船上山といふ所へなし奉りける程の忠ためしなかりし事などしるしおかせましましける物の奥に書きそへさせ給ひけるとぞ」とあるによつて、通説の如く、長年への御製であらせられたのだらう。但、左註は文體から見ても後人の記入に相違ない。櫻雲記にも、「三月十五日主上宸筆ヲ染メラレ御製ヲ長年ニ賜ハル」として此の一首を出して居り、伯耆之卷（群書類從卷第三百七十二）にはその節の勅書全文をも掲げてゐる。

世治まり民安かれと祈るこそわが身に盡きぬおもひなりけれ

○續後拾遺集卷第十六・雜歌中に出。解説を要せずして、叡慮の程は明らかである。同集は正中二年成立だから、此の御製は天皇即位遊ばされて、まだ程なき時分の御事である。

短夜みじかよははやあけがたと思ふにも心せかるる朝まつりごと

○臨永集卷第九雜歌上に出。夏夜言心。短夜、「ほととぎす鳴くや五月のみじか夜も」云々と古人の詠じた夏の夜のこと。朝まつりごと、「天皇早朝ニ正殿ニ出御アリテ政務ヲ聞シメサルル

「ト」と大言海にあり、長恨歌に從此君王不早朝とあるその朝政事である。仲夏の短夜も最早、明方になつたと思ふにつけても、心急ぎ立てられる、その朝政事よ、と政務の御熱意が歌はれてゐる。

露よりもなほ事繁し萩の戸のあくればいそぐ朝まつりごと

○續後拾遺集卷第十六雜歌中に出。前出の御製と全く同一の御心持を歌ひ給うたのであるが、此の方は技巧が纖細に出来上つてゐる。萩の戸、清涼殿の夜の御殿に接した一室の名で、御障子に萩の畫が描かれてあるゆゑ、斯くいふ。あくれば、夜が明ければの意であるが、萩の戸が開ければと詞を懸けてある。露、繁、萩は縁語として用ゐられてある。一首の意は、此の頃は政務多端で、秋草に置き渡す露よりも繁い。よつて、夜が明けるを待ちかねて、朝政事にわれは急ぐことよ。○ここでことわらねばならぬ事は、當時は所謂里内裏で、果して萩の戸など有つたか否か疑問なのである。或は、形式的に、御所の内に拵へられてあつたかも知れぬ。里内裏の事は、後出「讀人不知」昔だに沈むうらみをの歌の條參照。建武元年正月大内裏造營の議あり、同二年二月廿八日造内裏行事所始があつたけれども、やがて時行（北條）の亂や尊氏の謀叛が起つたので、内裏の御造營はそのまま實現されなかつたに相違ない。然るに太平記卷第十四「長年歸洛事附内裏炎上事」の章に、延元元年正月十日、尊氏入洛の前日、四國西國の兵ども亂入して、紫宸殿の

御障子を引破り、はては火を放つて、「三十六殿十二門」灰燼に歸した由、形容澤山に書いてある。勿論これは作者の架空的脚色であらう。

いそぐなる秋の砧の音にこそ夜寒の民の心をも知れ

○續千載集卷第五秋歌下に出。いそぐなる秋の砧、砧を打つ音が秋ふけて、せはしなくなるを云。一軒や二軒ではなく、此處でも彼處でも打つから、なほさら慌忙あわただしく聞えるのである。砧の音がいそぐと云ふ表現は古歌に屢々用ゐられた。實感でもあつたらうし、又一つには、寒衣處々催刀尺、白帝城高急暮砧といふ唐詩などの影響でもあつたかも知れない。夜寒の民の心をも知れは、貧しい蒼生に對する帝王の御同情である。延喜の帝は冬夜御衣を脱がせ給うた。攝政良經には「おほふべき袖こそなけれ世の中に貧しき民の寒き夜な夜な」といふ述懐の作があつた。○此の御製は、隱岐か吉野あたりでの御實感と一應考へられる。乍併、長安一片月、萬戶擣衣聲といふ如く、昔の京都は秋夜到る所で砧の槌の音を聞いたやうである。新古今集に「千たび打つ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる」とあり、拾遺愚草に「衣打つひびきに月の影ふけて道ゆく人のおともきこえず」と歌つてゐる。此の定家の歌で觀ると、その頃の京洛は、滿街擣衣夜沈沈と云ふ趣であつたに相違ない。天皇或は、里内裏の夜の御殿に獨坐、此の御製を誦し給うたのであるまいか。天皇には、更に一首、「聞きわびぬ八月長月ながき夜の月の夜さむに衣うつ聲」

といふ御名吟があらせられる。

ここにも雲居の櫻咲きにけりただかりそめの宿と思ふに

○新葉集卷第二春歌下に出てゐる、有名な御製。「吉野の行宮におはしましける時雲井の櫻とて世尊寺のほとりにありける花の咲きたるを御覽じてよませ給うける」と詞書。この吉野の山奥にても、禁庭の名にちなんだ「雲居のさくら」といふのが咲いたことよ。われは此處を京師とは考へず、唯しばらくの、假りの住み家と思つてゐるのに。斯う御述懐なされた御心中には、雲居櫻に慰められた御心持と、この花讖を成して永く吉野を皇居とするのではなからうかといふ御さびしさとが、相剋してゐるのである。實に深い御製と拜する。第五句、池藻屑などには「宿と思へど」としてあるが、多分新葉集を誤寫したのであらう。○雲居櫻の詠は、當時他にもあつた。それは、「み吉野の雲居の櫻名にしおはば早も都の春を見せなむ」といふ、天授元年五百番歌合の、長慶天皇御製である。現今、上千本南方の山腹、峰入りの道の傍に、名所として「雲井櫻」なる古木が残つてゐる。御製の歌序にある「世尊寺」が果して此の邊であつたか否か判明しない。櫻樹は短命であるから、現今の雲井櫻は、植ゑつき植ゑつき、何代目のであるかも、わからない。乍併、御製の遺烈によつて、花の名は永久に残る。

花に寝てよしや吉野のよしみづの枕の下に石いは走るおと

○元祿九年出版貝原益軒著「和州巡覽記」、その他二三の書に出。三十三所圖會にも所載。

「帝京都を逃れさせ給ひ、先づ當院へ行幸ありて行宮とし、後に實城院に移り給ふ。此院の床を枕として詠み給ひし御歌」とある。吉水院は藏王堂を南に距る約三町、道路から左側に稍々低下し、如意輪寺を隔てる深い谷の上に位置する。溪流の音は潺湲として、正しく下から聞えて来る。今日のたたずまひも、御製の通りだ。よしや吉野の吉水のと頭韻を踏んだ律呂の滑らかさは、滯らぬ水の流れを想はせる。此の一首、新葉集にも、その他當時の古文獻にも見當らないけれども、惜しいので、徳川時代の書物を信じて、ここに載せる。○中村直勝氏著「南朝の研究」に、次のやうに書いてある。天野山金剛寺の祕文書なる「禪惠奥書」によると、延元元年十二月廿一日花山院を私かに出御し給うた後醍醐天皇は神器を奉じて吉野に入御し給うた。其の御道筋に先づ賀名生に到着された事が、太平記並に梅松論には記して居るけれども、神皇正統記等南朝側の史料として最も有力なものには何等の記述がない。然るに禪惠奥書第七によれば、廿三日賀名生に入御、廿八日吉野に行幸とあつて、太平記等の記事を裏書する事となると同時に、吉野着御の日も大體は廿八日と推定し得る。○島津久基氏は此の御製を解釋して、「花の吉野の行宮の風雅を御詠じ遊ばされたものであるが、その御詞の裏には萬乗の尊き御身を以て、この山奥の谷水のせせ

らぎを御枕に聞召し給ふ御艱苦と、それをよしやと紛らして、却つて花に寝る風流に御執りなし遊ばされた勿體なさが拜察される」と言つてゐる。

都だにさびしかりしを雲晴れぬ吉野の奥のさみだれの頃

○新葉集卷第三夏歌に出。「吉野の行宮にてうへのをのこども題を探りて歌よみ侍りけるついでに五月雨といふことをよませ給うける」と詞書。うへのをのこ、殿上人。都だに、このだにはでさへもの意。この梅雨は、悵々たる御心の曇りから降る雨なので、普通のさびしさとは違ふ。

この里は丹生の川上ほど近し祈らば霽れよさみだれの空

○新葉集卷第十六雜上に出。「芳野の行宮にて五月雨晴間なかりける頃雨師の社へ止雨の奉幣使などたてまつられける頃思召つづけさせ給うける」と詞書。此の吉野の里は雨師神の鎮まり給ふ丹生の川上に程もなく近い處である。われ此處にゐて奉幣使を遣して祈るならば神もそれを享け給ひて、雨は止んでくれよ、此の心も暗くなるやうな五月雨の霖雨よ。○丹生川上、吉野山南の溪で南吉野村字丹生の地。ここには丹生川上神社或は雨師神社と申して祈雨の大社あつて中世には二十二社中に列せられた。又此の神社よりも一里ばかり上流に椿谷雨師獭の観音堂なるものあり天皇の祈り給うたのはこの観音堂なる由、名所圖會にある。○名所圖繪の説の根據は不明で

やはり丹生川上神社に祈り給うたと解するが正しからう。類聚三代格に「昔此神教し給はく、人聲の聞えぬ深山吉野丹生川上に我宮柱を建て敬奉らば、甘雨を降らして霖雨を止給はむと教給ひき、故宮社を造りて仕奉りき」云々。又早には黒馬、霖雨には白馬を奉りて祈ると古書に見える。ながむるを同じ空とぞ知らせばや故郷人も月は見るらむ

○新葉集卷第八霽旅歌に出。隱岐とか吉野とか、さやうの、京都を遠く離れた所での御感慨と拜察する。故郷人、天皇が故郷と仰せられる所は京都の外にない。故郷人はその京都にゐる故舊達といふこと。今夜斯うして我がもの思ひながら見てゐる空は、「汝等のながめてゐる天と同じ天である」と知らせてやりたく思ふ、京都の故舊等もおそらく此の月光を見てゐるであらうから。西行法師の「月見ばと契りて出でしふるさとの人もや今宵袖ぬらすらむ」といふ旅中吟も、白樂天の三五夜中新月色、二千里外故人心といふ詩句も、略おなじやうな心持である。

臥しわびぬ霜さむき夜の床は荒れて袖にはげしき山おろしの風

○新葉集卷第六冬歌に出。「吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に」と詞書。臥しわびぬ、寢ようとしても寢られぬ、の意。床は荒れて、臥牀は荒れての意であるが、多分、山風に御寢所の帷幔などが吹き倒されるやうな荒涼じい有様を言はれたのであらう。○吉野行宮、後醍醐天皇

吉野に潛幸し給うた時、先づ吉水院に入らせられて、行宮とし、後に金輪王寺實城院に移らせ給うた。これを金輪王寺御所と云。吉水院も實城院も、金峰山藏王堂の供僧房であつた。これらの佛閣僧堂は、正平三年一月廿五日、賊軍の亂入によつて皆兵火に罹つた。

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治めがたさを

○新葉集卷第十八雜下に出。寶算四十八の御時。「建武二年うへのをのことも題を探りて千首の歌つかうまつりける次に」と詞書。うへのをのこ、殿上人のこと。身にかへて、我がいのちにも代へての意。蒙古の來襲迫つた文永五年四月、龜山天皇には宸筆宣命を伊勢大廟に奉つて、身を以つて國難に代らむと祈願し給うた。それと同じ大御心なのである。國家の爲め、蒼生の爲めには、一天萬乗の尊體も顧みないと云ふ、畏多い大御心なのである。建武二年といへば、中興の業成つて幾何もないのに、尊氏が鎌倉に反旗を飜した年だ。民心の嚮背常無きを痛嘆し給うての御製と拜せられる。民心正しきに嚮つて國家さへ安泰を得るならば、我がいのちをそれに代へ度く思つてゐる、この心を人民等に認識させ度いものだと思き給ふのである。

こと問はむ人さへ稀になりにけりわが世の末の程ぞ知らるる

○新葉集卷第十九哀傷歌に出。寶算五十一の御時。詞書「吉田前内大臣右大辨清忠など打つづ

き身まかりにける頃思召つづけさせ給うける」吉田前内大臣、後出「吉田定房」の條參照の事。右大辨清忠、坊門清忠のこと。この二人とも延元三年に薨去。政務を諮詢していろいろ忠告をしてもらはうと思ふ重臣等も年々凋落し、今年は又二人まで續けて亡くしてしまつた。わが世も末に近づいた事がしみじみ知られる。○わが世の末と悲しい御述懷をあそばされて、翌年崩御。

露の身を草のまくらに置きながら風にはよもと頼むはかなさ

○新葉集同巻に出。寶算五十二の御時。「吉野の行宮におましましける頃御心地例ならざりけるを御風の氣なれば定めて早くおこたらせ給はむずらむなど人の申しければ」と詞書。かりそめの御風邪のことであるから、やがて御快癒疑ひない由を侍臣等が言上した。すると、天皇には、さう軽い事とは思召されず、殆ど御辭世かとも拜せられるやうな御製をあそばされたのである。露の如く消え易くもろい身を、しかも旅先の草枕に臥しながら、風（風邪）ぐらゐにはよもや大事はあるまいと、そら頼みに頼んで、みづから慰めることのはかなさよ、の意。露、草、風は縁語。○天皇は延元四年八月十六日、吉野の行宮（實城院）で崩御あそばされた。その御時のことは、神皇正統記卷之六に、「さても八月の十日餘六日にや、秋霧に侵されさせ給ひて、崩れましましぬとぞ聞えし」と記してある。著者親房は此の時常陸小田城に在つて、拜聞したのである。太平記には、卷第二十一「先帝崩御事」の章に頗る詳細に記述してゐる。それによると、八月九

日御發病、僅七日の間に御大事にならせ給うたのであつた。「朕則早世の後には、第七の宮を天子の位に即奉りて、賢士忠臣事を謀り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎮べし。思之故に玉骨は縦南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望んと思ふ。若命を背義を輕ぜば、君も繼體の君に非ず、臣も忠烈の臣に非じと、委細に綸言を殘されて、左の御手に法華經の五卷を持せ給、右の御手には御劍を按て、八月十六日の丑尅に、遂に崩御成にけり。」兼て遺勅有しかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし、御座を正して、吉野山の麓、藏王堂の良なる、林の奥に圓丘を高く築て、北向に奉葬。」かうして。た。だ。か。り。そ。め。の。宿。前出御製參照)と思召された山中を永久の御座となし給うたのであつた。

二 後村上天皇御製九首

第九十七代の天皇。御諱は義良。後醍醐天皇第七皇子、御母新待賢門院藤原廉子。元弘延元の間、北畠顯家を從へて奥羽を討伐し給ふこと再度。延元三年秋、三度任國奥州へ赴かれんとして海上暴風に遇ひ伊勢篠島に御着、四年二月吉野に還り給うた。三月皇太子に立ち四年十月五日吉野行宮にて即位し給ふ。時に寶算十二。正平三年正月、賊行宮を犯し

二〇 萬里小路藤房三首

藤原高藤流の萬里小路家、權大納言從一位宣房の長子。後醍醐天皇に仕へて、元弘元年中納言と爲り正二位に叙せられた。八月神器を擁して車駕に従ひ笠置山に逃れ、翌月笠置陥るや、天皇を扶けまゐらせて有王山まで落ちのびたが、賊兵の追及にあひ捕へられた。翌二年五月、常陸に流され、三年五月北條亡びて京都に歸る。建武中興の失政に對し、屢屢上奏諫言したが容れられず、建武二年三月、北山岩藏の不二房を戒師として出家。天皇驚愕し給ひ、父宣房をして探さしめられたが、遂にわからなかつた。時に年四十。終る處を知らずと云。

いかにせむたのむ蔭として立ちよればなほ袖ぬらす松の下露

○太平記卷第三「主上御没落笠置事」の章に出。三十六歳作。元弘元年九月廿八日夜笠置陥落。天皇は藤房・季房兄弟に扶けられ給ひて、晝夜三日山野を徘徊あそばされ、山城國多賀郡有王山の麓で遂に賊兵の手に落ち給うた。とある木蔭に立ち寄られて、さしてゆく笠置の山を云々と遊

ばされたに對し、藤房和し奉つたのが右の歌である。なほ袖ぬらすのなほは、やはり、同じこと
にの意で、俗に云ふ一しほといふ事とは違ふ。

住み捨つる山をうき世の人間はばあらしや庭の松に答へむ

○太平記卷第十三「藤房卿遁世事」の章に出。四十歳作。北條を討滅して建武中興は出來たけれども、歴史の語る所によれば、其後失政がかなり多かつたやうだ。政治機關の不統一・功臣恩賞の不公平・地方訴訟の輻輳・公武混淆等の事は太平記や梅松論や建武年間記などでも明らかである。藤房はこれを憂へて屢々直諫したけれども、御許容なかつた。又、鹽治高貞が龍馬を獻上し、天皇深く御満足あそばされたので、藤房は、「臣聞く、明主の瑞とする所は人才に在り、奇異の物は瑞とする所に非ず」と申上げた。離宮を建てられたり、大内裏を造營される事なども、藤房から觀れば不急の事であつた。「臣たるの道我に於いて盡くせり」と藤房は決心した。建武二年三月十一日、石清水八幡へ行幸の供奉を最後の御奉公と思ひ、目をおどろかさばかり華やかな裝束で馬に騎つた。行事了つて、その夜、龍顔に咫尺し奉り、それとなく御別れを申上げて、未明に退出。直ちに北山の岩藏に走つて、薙髪した。「齡未四十に不足人の、妻子を離れ、父母を捨て、山川抖擻の身と成りしは、ためしすくなき發心也」と太平記は惜しんでゐる。天皇驚き給ひ、父宣房をして蹤を追はしめられた。宣房北山の坊に行つて、尋ねると、既に住み捨てた庵

室の障子に、前掲の歌と黄檗の大義渡を題した古い頌とが書き遺されてあつた。あらしや庭の松に答へむ、我は既にここをも捨てて去る。訪ふ人があつたらば、われに代つて、風の聲が松の梢に鳴るであらう。○藤房の後日譚に就いては、種々の説がある。或曰、藤房僧となり侃山子と號して諸國遍歴、土佐に行き難船して死んだと。或曰、脇屋義助の臣畑時義が四國鷹巢山の岩窟中に老僧を見たが、風貌藤房に肖てゐたと。藤房遁世を「公卿補任」に従つて建武元年十月五日とする史家が多いけれども、太平記によれば建武二年三月十二日石清水行幸の翌曉なる事明らかである。南山巡狩録は石清水行幸を九月廿一日と記してゐるが、その典據不明。此の行幸が櫻花満開の春なりし事は、新葉集・北畠親房の歌「男山昔のみゆき思ふにもかざしし花の春ぞ忘れぬ」からも證明される。

君が住むやどのあたりを來てみれば昔に沾らすすみ染の袖

○吉野拾遺上に出。延元四年の頃、吉野にて、大納言實世の許に草刈童が手紙を持參した。實世披いてみると、此の歌が書いてあつた。「御手もさながら昔に變らぬを哀れと驚かせ給ひて、御使の童を召寄せて問はせ給へれば、今朝西なる野に出で草を刈り侍るに、瘦せ衰へたる修行者の、この文届けよと仰せさぶらひしと云ふに、急ぎ皇居へ參り給うて、大和紀の國河内關々に詔して、修業者をとどめけれども、それと覺しきもあらざりけらし。中納言藤房の御手もさぶらひし

りと。」と松翁は書いてゐる。○昔に汚らざる、懐舊の情に堪へずして涙にぬらす。凡そ此の類の物語を讀んで、光嚴院の御行脚と藤房の後日譚ぐらゐ、しんみり深く物を考へさせるものは無い。それらは悲しい歴史でもあり、深い詩でもあり、美しい物語でもある。○藤房は遁世して花園妙心寺の第二世になつたと云ふ説がある。南山巡狩録にも「藤房卿は六祖記に見ゆる如く洛北妙心寺に遷化し給ふこと實を得たるが如し」と書いてゐるけれども、今日の歴史家にはこれを信ぜぬ者が多い。ともかく參考までに、妙心寺發行の小冊子「圓鑑國師・藤原藤房卿」から抜書する。「圓鑑國師は諱を宗弼、字を授翁と言うたのでありますが、それは出家されてからの名であります。大燈國師より授つたのであります。」「宮仕の暇を得ては北野の自邸より紫野の大徳寺へ通つて、大燈國師に參禪をして、孜々として修養をされたのであります。此の因縁で、後に大燈國師の法を相續された妙心寺開山無相大師の門を叩いて參禪し、其の奥義を究められたのであります。」「一度岩倉に出家されてからは常に所定めぬ修業の行脚をされたのであります。觀應二年開山無相大師が妙心寺に再住せらるるに及んで、藤房卿の圓鑑國師も亦洛西池上村の杉庵といふに住して、日々無相大師の下に通參し、」「無相大師から印可證明を受けられたのは六十一歳の時で、延文元年でありました。」「圓鑑國師は諸國を遍歴されましたので、伊豆の熱海の温泉寺を始め、三河一色町養林寺、秋田縣の補陀落寺、下野の長光寺其他澤山に遺されてゐますが、國師六十五歳の時、師の無相大師が遷化されて以來、二十年の間妙心寺に住して、大衆の接化に努

められたのであります。「江州三雲の妙感寺に隱棲され病を養はれたのであります。康曆二年三月廿八日に八十五歳で大往生をされました。」「萬治二年七月十二日には後西院天皇より妙感寺へ勅使が立ちまして、神光寂照禪師の諡號を賜はり、「明治天皇は明治元年東幸の砌り、勅使を以て妙感寺の塔所を展せしめ給ひ、金幣を下賜し給ひ、續いて明治十二年、圓鑑國師の徽號を追賜し給うたのであります。」更に、昭和二年三月廿二日、特に「微妙」の大師號を賜はつた。花園妙心寺の第二世として、元弘・建武の忠臣藤房が住し、嵯峨天龍寺の開山として武家方の夢窓國師が居り、而して、夢窓國師と、藤房の師なる無相大師とは互に相許した高僧であつたといふ。

一一二條爲冬一首

藤原定家の子孫なる歌道の家に生まれた。大納言爲世の第三子。左近衛中將に任じ、正四位下に叙せられた。建武二年十月、尊氏鎌倉に據つて反するや、義貞尊良親王を奉じて之れを討伐したが、爲冬は親王の軍に従つて東征。十二月十一日、官軍箱根竹下に敗れ佐野原に退いたが、賊軍の追撃急で、爲冬も亂軍の中に殲れた。太平記は「是にて中書王

(尊良親王)

の股肱の臣下と憑み思召したりける二條中將爲冬討たれ給ひければ」云々と書いて

第三部

吉野朝の悲歌・續篇

一 後醍醐天皇御製十首

治まれる跡をぞ慕ふおしなべて誰が昔とは思ひわかねど

○風雅集卷第十七雜歌下に出。「雜の御歌とて」と詞書。十三代集の一なる風雅和歌集は、正平元年（光明院の貞和二年）に成立したのだから、後醍醐天皇崩御後に編纂せられたのである。従つて、此の御製は何年頃に御詠み遊ばされたものか、今日からは推測出来ない。○われは本朝の歴史を顧みて、列聖治世の蹟を常に景慕し、その善政に倣はんと心懸けてゐる。おしならして、すべて、いづれの御宇と、いづれの時代と取り分け區別して考へる次第では無いけれども。○誰が昔とは、いづれの天皇の昔（その治世）と。思ひわかねど、思ひ分くと云ふ事は、思慮辨別する事で、例へば歴代の中でも、特に延喜又は天曆の御治世を指して、それを辨別して念頭に置くこと。思ひわかねどと仰せ給うたのは、さやうの區別はせず、いづれの御代でも善政ならば倣はんと御思召。萬乗の天子が政事に御心を傾け給ふ、忝い御述懐である。○續拾遺集釋教歌・法印叡信「思ひわく六の心を離れてはまことを悟る道やなからむ」など參考。誰が昔といふ語は、

新後拾遺集夏歌・近衛道嗣「匂ひ來る花橘の夕風は誰が昔をか驚かすらむ」など、折々用ゐられてゐる。

民のため時ある雨を祈るとも知らずや田子の早苗とるらむ

○新千載集卷第三夏歌に出。「百首の歌召されけるついでに」と詞書。新千載和歌集は正平十四年（後光嚴院の延文四年）成立であるから、此の御製も御作年次はわからない。○時ある雨、五風十雨と云ふ如く、天候順調にして、降るべき時に降る雨。禮記に「天降_三時雨、山川出_レ雲」田子、田圃におりたち働く農人。早苗とる、初夏稻の苗を植ゑ付けること。○われは常に、人民のために、季節正しく氣候順調、降るべき時に慈雨の降るやうに天に祈つてゐるのであるが、上にさやうの苦心ありとも知らず、農夫らは斯うして何事も知らぬげに、唯稻を植ゑ付けてゐるのであらう。苗代水が慈雨に濕ふといふ事も、あだやおろかな事、偶然の事では無いのであるけれども。○續後拾遺哀傷歌・藤原義孝「春雨の時にしたがふ世の中に今はふるぞと思ふ悲しさ」など参考。○天皇は長くも、斯様に蒼生の事を思ひやり給ふのであつた。建武中興が短日月にして挫折したのは、天皇の御失政に因るもの多しと、太平記も、現今の學者の多くも論じてゐる。頼山陽の「日本樂府」にも翻覆手と題し、建武中興の失政を、「手を翻_ひして予へ、手を覆_くして奪ふ。關を擁する土心飢渴の如し。決戦及ばず、歌舞の兒に。海に漂るまで復讐の難を立つる事

し。道ふ莫かれ、此の地是れ君の有と。天子へ天奪ふ、翻覆手」と詩化して批判してゐる。史家にあらざる私は、その當否を知らない。唯遺存せる幾多の御製によつて、天皇の英邁且つ仁慈にあらせ給うた事を疑はぬのである。

つひにかく沈みはつべき報むくいあらば上なき身とは何生まれけむ

○増鏡「久米のさら山」の章に出。元弘二年三月、寶算四十五の御時。○隱岐遷幸の際の御有様を増鏡は叙して「遂に隱岐國へ遷し奉るべしとて、三月元弘二年のはじめ七日に、都を出でさせ給ふ。今はと聞し召す御心まどひも言へば更なり、所々の嘆、近う仕りし人々の心地もおき所なく悲し。みかども限なく御心惱むべし、いとかう人に見えじと、かつは思し鎮むれど、あやにくにすすみ出づる御涙を、もて隠しつつかおはします。ふりにし事を思し出づるにも、立ちかへり又世を安く思さん事のいと難ければ、萬よろづ今をとぢめにこそと思しめぐらすに、人やりならず口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞ、盡きせず恨めしき」と、さまざまに叡慮の中を推量し、次に此の御製を擧げ奉る。○竟に、このやうに、沈淪し果つべき報むくいを前世の因縁によつて持つ我が身であるならば、なまじひに、何故に、天子といふ如き無上の位に生まれて來たのであらう。賤しき身に生まれて來た方が幾倍幸福であつたか知れぬ。○畏多くも、かくまでに御境涯を嘆かせ給うたのであつた。輪廻因果の思想が、この御製の根柢になつてゐる。鎌倉以來の物語や軍記など

に屢々出て来る「忝くも十善の天子」といふ語も、勿論佛教に基く。

いさ知らずなほ憂き方の又もあらばこの宿とても偲ばれやせむ

○増鏡「久米のさら山」の章に出。元弘二年三月、寶算四十五の御時。○増鏡の記述によれば、この時、主上には網代の御車に召され、御冠おんかうむに普通の御直衣・指貫、勿體なくも粗末なる御旅装束を纏ひ給うた。さうして六波羅を將に御出發遊ばされんとする際、この御製を「日頃おはしましつる傍の障子」に書きつけ給うたのであつた。○いいや、どうぢややらわからぬ、これから行く先の旅路には、もつと、もつと憂おもく辛い思ひをせねばならぬ所もあるだらう。もしさうであつたらば、六波羅の此の家でさへも、なつかしく思ひ出されるかも知れない。○いさ知らず、紀貫之の「人はいさ心も知らず」云々の、それと同じ。この宿、六波羅の板屋のこと。増鏡「むら時雨」の章によれば、主上には笠置陥落の後、六波羅の「南の板屋のいとあやしき」に幽閉せられ、隱岐遷幸まで五箇月餘を其處に御起居遊ばされたのであつた。然るに今、遠島への御出發に際し、そのあやしき板屋をさへ偲ぶ場合もあらうと仰せ給ふは、おんいたはしき限りではないか。六波羅より、七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の方へと網代の御車は進む。「物見車所せき程なり、よろしき女房も壺装束などして、徒歩かのものども、打まじれり。若きも老いたるも、尼

法師、あやしき山賊まで立あ鹿みたるさま、竹の林に異ならず。各自押し試み、驚おどすすりあくる

けしきなども、げに浮世の極めは、今に盡しつる心地ぞする」と増鏡にある。新古今集雜歌下藤原清輔の「ながらへば又このころや偲ばれむうしとみし世ぞ今はこひしき」参考。○詞書、傍障子云々、古詩源・隋詩に「謙周まご自づから柱に題すとも、商容誰か間に表せん」とあり、詩歌を壁や柱などに題するは非常に古くからのことらしい。

花はなほ憂世うれよもわかず咲きてけり都も今やさかりなるらむ

○増鏡「久米のさら山」の章に出。元弘二年三月、寶算四十五の御時。○播州高砂のあたりを過ぎ給ふ時、「いと高き山の峯に、花おもしろく咲きつづきて、白雲をわけゆく心地するも艶なるに、都の數々思し出」でられて、この御製。増鏡は斯く書いてゐるけれども、加古川や高砂あたりの街道は殆んど海に沿ひ、いくら爛漫でも、「白雲をわけゆく心地」するやうな「高き峯」はない。按ふに此の御製は、もつと先、或は美作あたりの山中にての御感想かと推測する。○櫻花はこの憂れはしき世相も知らぬげに、到る所に咲きこぼれてゐる。我が別れ來し京都の花も、今が眞盛りであらう。○新古今集羈旅歌・後鳥羽院御製「みるまゝに山風あらくしぐるめり都も今は夜寒なるらむ」など参考。○この後醍醐天皇の御製に限らず、殊に南山に行宮を徙遷されてから後は、所柄かも知れぬが、吉野朝の悲歌には櫻花に關係あるもの頗る多い。私はそれらを誦する毎に、唐・薛能の漢南春望「獨り春色を尋ねて高臺に上る、三月皇州鶴未だ回らず、幾處の

松筠ぞ焼後に死れ、誰が家の桃李か亂中に開く、姦邪法を用ふるも元法もとにあらず、唱和才を求むるも是れ才ならず、古より浮雲白日を蔽ふ、天を洗ふ風雨幾時か來らん」を想ひ出さぬことはない。

こゝろさす方を問はゞや浪の上うへにうきてたゞよふあまの釣船

○増鏡「久米のさら山」の章に出。元弘二年（或は三年）の御製。○かくて主上には、増鏡によれば、四月一日の更衣の日をも御途中にて過すさせ給ひ出雲國安來港から御船に召されたとあるが、隱岐着御の日附は記してゐない。太平記によれば、三月十三日出雲見尾湊みおに著かせ給ひ、十餘日御逗留の後、廿六日に隱岐着御と明記してある。行在は、増鏡に「海づらより少し入りたる國分寺といふ寺を、宜しきさまに取拂ひて、おはしまし所に定む」と記し、太平記は「國府こくふの島と云所に黒木の御所を作て皇居とす」と記す。これに就き、大日本地名辭書は「太平記にも隱岐國府の島といへば、此國分寺の行在なりしこと明晰とすべし。島前の知夫里、別府等に行在を説くは、其言ふ所殆ど信據なし」と述べてゐる。郷土史研究者にも、それぞれ説があらうけれども、私には未審。○増鏡は此の御製に關連して、「つれづれに思さるる折々は、らうめく所に立ち出でさせ給ひて、遙に浦の方を御覽じやるに、あまの釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる心地するも、あはれに、いづくをさしてか、と思さる。」「浦とぐ舟のかぢを絶え、せうも懸てか

御涙のこぼるるを、何となくまぎらはし給へる、いふよしなく心深げなり。」○いづれの方へ志して漕ぎ行くかと、その方角を試みに尋ねて見度いものである。いづれの方角を指して漕ぎゆくと、汝の落ちつく所はあるまいぞ。この漫々として際涯なき海濤の上に、たよりなささうに浮き漂へる漁師の釣舟よ。○「只今の我も亦、汝によく似たる、頼りなき身の上なるよ」といふ御心持が、底に流れてゐる。増鏡の舉げた浦こぐ舟のかぢを絶えは、續古今集雜歌中・小野小町の「すまのあまの浦こぐ舟の櫂を絶えよるべなき身ぞ悲しかりける」を指すので、御製の意と相通ふゆゑ、舉げたのである。然るにこの御製を解して、小野篁の「わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣船」を本歌と考へ、「もしも汝が都の方へこぎゆくのならば、我が傳言を頼まん」の意とする説あるは、如何かと思ふ。御製には多分そのやうなる御考へは無く、一途に只今の御境涯の頼りなさを嘆き給うたのであらう。むしろ、宗良親王が「世をうみの浪に浮べるあま小舟よるべあればぞさして行くらむ」と歌ひ給ひしに通ずると云ふならば、當つてゐる。聞きわびぬ八月はつ長月ながつきながき夜の月の夜寒に衣うつこゑ

○新葉集卷第五秋歌下に出。「元弘三年九月十三夜三首の歌講せられし時、月前擣衣といふことを」と詞書。新拾遺集秋歌下にも出。元弘三年、寶算四十六の御時。○聞いてゐるのも、わびしくつらくなつた、八月といひ九月といひ、連月、秋の夜長の頃の而かも月光の寒く冴えゆく頃

に、遠近所々で衣を擣つ槌の響きは。○八月、長月、長き夜の、月の夜寒と、ぐんぐん重ねて追る格律の強さは、すばらしい。月といふ語を三度くりかへし、長月長き夜と受けて續けられた呼吸も申し分ない。白樂天の八月九月正長夜、千聲萬聲無了時を本としてゐられながら、決して直譯でなく立派に純日本の言葉に消化して居られる。古今擣衣の歌の傑作中に入る。

あきらけき時しあればと久方の雲居の月に秋風ぞふく

○藤葉集卷第三秋歌に出。「建武元年八月十五夜、五首歌講せられける次に、月前秋風といふことをよませ給うける」と詞書。建武元年八月、寶算四十七の御時。○詞書、五首歌講せられける、人々に五つの題を賜はりて歌を召され、それを披講せられたこと。月前秋風は五題中の一。藤葉集、藤原實教撰と傳へられ、北朝の觀應・文和の頃に成立したものらしい。吉野朝廷の人々の作も入つてゐるので、俗に新葉集・風葉集と併せて南朝三葉集と云。○曇る夜のみではない、明らかに澄み晴れる時（中秋の頃）もあるが故にと、今宵この、大空の月光に秋風颯々と吹きわたる。○かく解すれば單に叙景の御歌であるが、私かに按ふに、さうでなく、もつと深い御心持が歌はれてゐるものと拜察する。時は恰も建武中興元年の中秋、皎々たる明月を御覽じて、世は妖雲に閉ぢられてゐる時ばかりはない。かやうに四方の妖雲を拂つて、久方の雲居、すなはち禁庭の明月に秋風高々と吹くではないか、と昂然として歌ひ擧げ給うたものに相違ない。建武の中

五夜にふさはしい、堂々たる御製と拜する。○その月光を、幾何もなくして妖雲再び覆ひ、延元以降の亂世となつたのは、かへすがへすも悲しむべきである。太平記の書きぶりや、現代多くの歴史家の説によると、それは後醍醐天皇の二三の御失政に基くと解せられる。乍併、歴史に暗い私であるけれども、さうは信じない。たとひ建武に御失政あつたとしても、そは天皇躬親みかみからの御反省と賢臣等の輔弼とによつて改善せられ得る程度のものであつた。中興の挫折は、どこまでも逆臣足利一族の陰謀に基因する。

音ねに立て、蟲もなくなり身ひとつの憂世を月にかこつと思へば

○新葉集卷第五秋歌下に出。「延元三年九月十三夜、うへのをのこども題を採りて、月の三十首の歌つかうまつりけるついでに、月前蟲といふことをよませ給ひける」と詞書。延元三年九月、寶算五十一の御時。○うへのをのこ、殿上人。○堪へ難く悲しげに聲を立てて、草叢の虫どもも鳴いて居るわい、身ひとつの、我が身のみに限られた憂世と考へ、それを月にかこつけて詫び言いふ我かと思つて居たるに。天地の間、さびしからぬものは無い悲秋の夜であるらしい。○古今集秋歌上・大江千里の「月みれば千々にものこそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」を本歌とする。下句は、西行の「嘆けとて月やはものを一云々参考」。

埋もるゝ身をば嘆かずなべて世の曇るぞつらき今朝の初雪

○新葉集卷第十六雜歌中に出。「題しらず」。御作年次は判然しないが、吉野行宮にての御製なること疑問ない。○山深き所とて、今朝は空かき曇り、早くも初雪が降つた。この雪の中に埋もれ果つる我が身一つのこととは如何でもよろしいけれども、（行宮裡に籠りて終るべき我が一生は諦めて嘆くまいけれども）おしなべて世間の曇るのが辛いことである。世の中に戦亂の暗雲ふかく立ちこめてゐるのが、蒼生の爲めに氣の毒で、堪へきれぬことである。○帝王の御心事、さこそと拜察する。鎌倉六代將軍宗尊親王は「なほ頼む北野の雪の朝ほらけ跡なき事に埋もるゝ身は」と御自身のことを嘆かせられた。後醍醐天皇の御製はちがふ。

二 後村上天皇御製六首

四つの海浪も治まるしるしとて三つの神寶たからを身にぞ傳ふる

○新葉集卷第二十賀歌に出。「題しらず」。後村上天皇即位（延元四年）の時には寶算僅に十

二八 萬里小路藤房二首

黒髪の亂れむ世までながらへばこれをいまはの形見ともみよ

○太平記卷第四「笠置囚人死罪流刑事附藤房卿事」の條に出。元弘元年八月作。太平記の小説的記述によると藤房には後宮の女官左衛門佐局といふ戀人があつて、その戀の成立した即夜に、後醍醐天皇笠置へ潜幸といふ大事變突發した。藤房衣冠を脱ぎすて戎衣になつて供奉せんとするに際し、鬢の髪を少し切つて此の一首を添へ、女房の住む西の對に置いて去つた。○天下は大事となつた、亂世が續くであらう、もしもそなたが命長らへてゐたならば、この髪の毛を我が形見として、大切にせよ、我は戰亂の間に殞れるであらう。黒髪の、みだれへかかる枕詞であるが、相手方が女性なるゆゑ、一層利く。○左衛門佐局は歸つて來て、この形見を手にするや、大堰川の淵に投身して悲戀の終りを遂げたと、太平記に、美文をふるつて述べてゐる。局の辭世、「書き置きし君がたまづさ身にそへて後の世までの形見とやせむ」

こゝもまた憂世うれいよの人のとひくれば空ゆく雲に宿もとめてむ

○吉野拾遺に出。脇屋義助の部將畑六郎左衛門時能が越前國鷹の巢山に城を構へんとして登りたるに、谷の岩陰に小庵あり、木の葉を集めて筵とし、石の上に法華經を置いてあつた。暫くすると、やせ衰へたる僧が歸つて來て、經の紐を解きはじめた。「いかなる人の世をそむかせ給ひけるにや」と時能が尋ねたるに、僧は本意ない顔して、「東あづまのものにこそ」とばかり答へて、又經を誦しはじめた。時能が歸館して、これこれの次第、「藤房卿の面影して侍る」と告げたので、義助も大急ぎで、その岩陰の庵に行つてみると、石の上に、ここもまた云々の一首が書き残してあつて、僧の姿は見つからなかつた。といふことを義助が興國二年行宮に來た時話した體に、吉野拾遺は書いてゐる。○歌意明瞭。○南山巡狩録は、時能藤房にあふ挿話を、延元三年の事と推定してゐる。北越に於ける戰爭の經過から推して、その頃の事と判斷したものらしい。○兼好法師の「ここもまた憂世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」など參考。○藤房には太平記にて有名なる「いかにせむ頼む蔭とて」云々外、立派な歌數首遺つてゐるのに、何故に新葉集に一首も採られなかつたか。これに就き、南山巡狩録著者大草公弼説をなして曰く、藤房卿もらせし一事は撰者宗真親王の意あるが如し。かの卿實に北朝に心を通はし給へるにはあらねど、都近き妙心禪寺に居給ふ故に、南山にて主上の思召さるる所よからずして、新葉集の作者に加はり給

はざりしか。」少々穿ち過ぎてゐる嫌ひはあるけれども、一個の觀察に相違ない。圓鑑國師即藤房とする一派の説は、忠臣藤房の傳記上に必ずしも有利で無い。いくら世間を超脱した一高僧でも、當時武家方と善からずして洛外の禪院に晏如として留錫出来る筈のもので無からう。

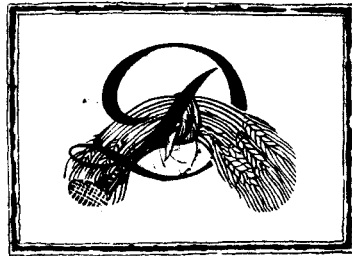
二九 松翁一首

隱士松翁は吉野拾遺の作者、本名不明。侍從忠房ならんと云ひ、又吉房といふ侍臣ならん、否、今川了俊の僕命松丸ならんなど諸説がある。吉野拾遺は、後醍醐天皇吉野に潛幸の延元元年から後村上天皇の正平十三年までの間に於ける説話逸事の類を書き蒐めたもの。今ははや忘れはつべき古いにしへを思ひ出でよとすめる月かな

○吉野拾遺に出。延元四年九月作。松翁は吉野拾遺の中に自傳の一部を記してゐる。それによると、もとは廷臣の一人であつたが、延元四年八月先帝の崩御に遇ひ奉り、悲嘆の餘りに剃髪して名を松翁と改め、如意輪寺の御廟のほとりに庵を結んで、御冥福を祈りまゐらせた。九月十日あまり、月光澄明の夜この一首を詠む。○今ははや云々、斯くなり果てた今日は、歸めて、さつ

本定
歌悲の朝野吉

部百二千刷初



滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の
外地定價四圓十八錢

昭和十四年九月十五日印刷
昭和十四年九月二十日發行

定價三圓八十錢

著者 川田 順

刊行者 長谷川巳之吉
東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房
東京市麹町區三番町一

振替東京六四二二三
電話九段三三四四

東京市牛込區南吹町一九八
印刷者 萩原芳雄